

1. はじめに

日本ではアジア諸国、特に中国、韓国との間で第二次世界大戦の歴史認識を巡り長年議論があり、時に外交的対立や争点の領域となってきた。同時に過去をどのように記憶した共通理解をいかに形成し得るのかを追究してきた。本研究では日本軍による苛烈な軍事侵攻と支配があったにもかかわらず、日本との間で歴史認識が外交問題にならないフィリピン社会における歴史認識のあり方、つまり過去との共存の仕方＝記憶と忘却による「消化」の実態を明らかにし、未来志向型の歴史認識のありかたを模索する際の示唆を得ることを目的とする。

過去の悲慘を繰り返さないために歴史を記憶することが重要だとされる。しかし事態を直接経験しない世代が後世の言説を経て「社会的記憶」としてそれらを受けとる時には、相手に対する憎悪の感情を増長する可能性がある。一方、過去の悲慘をいち早く忘れ未来に向けた関係を構築することは建設的である反面、忘却は悲慘の繰り返しを招いたり、状況によっては容易に相手への憎悪を再燃させる土壌ともなりうる。歴史の記憶と忘却は単純な歴史的事実の集積の中で生じるのではなく、常に政治的社会的文脈に規定された営為の結果として生じる。時々の政治文脈によって常に組み替えられ、再編成される。こうした前提を踏まえた上で、戦中、日本軍により甚大な犠牲と被害を被りながらも、過去を政治外交問題化してこなかったフィリピンの「過去の消化」の要因とプロセスについて探るのが本研究の目的である。

本報告では第一に山下財宝言説の考察を通じてフィリピン人の歴史認識の在り方を分析し、第二にフィリピンの戦争に対する歴史意識の形成に大きな影響を与えたキリノ大統領の姿勢について検討をする。

まず戦後 80 年を経ていまだに日本軍最後の司令官山下奉文将軍の隠したとされる「山下財宝」Yamashita Gold をめぐる話題や実態を題材としてフィリピンの歴史「消化」の在り方を探る。全国で山下財宝探しに躍起になる者は少なくなく、米国や日本からのトレジャーハンターまで巻き込んだ探索プロジェクトもみられる。落盤、文化財破壊などの事件に発展することさえある。政府当局も、地質保全、文化遺跡保護の観点から財宝探索を禁ずる法律まで制定している。フィリピン社会では、山下財宝探しをテーマとした小説、映画、TV 番組、そして近年では YouTube 動画などが次々と発表され、多くの市民がいまだに関心を寄せている。

第二次大戦緒戦においてインドシナ半島から英国軍を電撃駆逐し「マレーの虎」として勇名を馳せた山下奉文将軍の名は、現在の日本ではさほど多くに知られているわけではない。しかしフィリピンでは、自国を日本の占領から解放したダグラス・マッカーサー米将軍との対

比で、山下將軍はフィリピン市民に残虐の限りを尽くした日本軍敗戦の將として誰でもが知る存在である。戦後長らく経た近年では軍人としての山下將軍というよりも「山下財宝」、「山下金塊」との関連で若い人を含めた多くの人々に知られている。

なぜいまだに多くのフィリピンの人々が山下財宝を追い求めているのかという問いを切り口として、フィリピン人の過去の認識、消化のありかたを探ってゆく。「山下財宝」なるものが実際に存在したか否かではなく、多くの者があるものとして受け入れている、あるいは少なくとも無いと否定せず受け入れている実態を、フィリピン人の世界観、社会認識、政治条件、生活慣習などの観点から掘り下げてゆく。そこにはわれわれ日本人とは異質の世界観に基づく過去の認識、歴史感覚がある。過酷な歴史経験を受け入れながらも、今現在の生活を楽しもうとする、ある意味楽天的なフィリピン人の価値意識や、格差、抑圧など個人の力で克服しがたい過酷な現実のなかで生きていかなければならないサバイバル戦略が背景にあると言える。彼らの世界観は一見、日本人のそれとは全く異なるように見えながら、突き詰めて考えればわれわれ日本人にも共有される特徴が先鋭的に現れている側面がある。フィリピン人の過去の消化の在り方を探る作業は、逆に日本の歴史観や世界観をも振り返る作業にもつながる。

以下では山下財宝をめぐるフィリピン人の過去認識の分析、および戦後の対日意識に大きな影響を与えたキリノ大統領の政治決断についての概要を整理する。

2. 財宝の存否

そもそも隠された財宝があるかどうかは定かでない。少なくとも財宝の存在や秘匿を裏付ける確たる資料は出ていないうえに、これまで金塊、宝石のような財宝が発見されたと誰もが認識できる確実な事実が存在しない¹。しかし全く何の根拠のないところに噂話が広がることも少ない。埋蔵財宝を想起させる、あるいは連想させる事実が複数あったものと推測される。

戦争末期に軍部がフィリピンに運び込んだといわれる「マルフク金貨」の語りや、日本軍が最後の司令部を置いたバギオのみならずフィリピン各地に地下施設を持っていたことなどが金塊埋蔵を連想させる根拠となっている。また戦争末期に転戦（敗退）する日本軍が武器弾薬、物資などを埋めて隠匿することが各地で現地の住民に目撃されたり、終戦直後、捕虜収容所等で日本人捕虜から金貨が出回ったという証言もある。終戦後、米軍および米政府が在フィリピン日本軍から多量の金を取得したとの言説もある。

フィリピンの日本軍は実質的な軍政支配をし、また米国との戦争を戦っていたので多額の資金が必要だった。日本からのなにがしかの資金準備、持ち込みがされたことは想像に難くない。占領期当時フィリピンからは鉱物資源（特に鉄）、木材の調達を急務として取り組んでいる。それも軍政監部（軍政部）の強制的徴発や裏付けのない軍票（現地ではミッキーマウスと呼ばれた）による買い上げが多く、それゆえに相当のインフレが亢進した。マルフ

ク金貨が政策的にあるいは経済原理に基づいて市場に出回るほど使われたかどうかは明らかにされていないが、むしろその可能性は低いと思われる。

ルソン北部に転戦（逃避）した日本兵の一部が最終盤に金貨を持ち出して携帯し、また現地人から金貨で米やたばこを買ったといった証言もある（生江有二）。こうして金が物資との交換で現地の人々に多少手渡ったという事実が、後に日本軍が多量の金塊をフィリピンに持ち込み隠し持った、あるいは埋蔵したという話につながっていったと考えられる。

最後の日本軍司令部、山下將軍投降の地となったバギオ市およびベンゲット州はいまでも財宝探索が盛んな地であるが、そこは奇しくも、歴史的に金鉱脈、金鉱山会社の多くあった地であり余計に金 Gold への想像力を掻き立てる。

3. 歴史意識の創作と書き換え

フィリピンでは自国が豊かな国であるという言説、フィリピンには富が世界からもたらされるという言説が広く流布している。それも山下財宝伝説を生む一背景と思われる。

スペイン植民地時代にマニラ＝メキシコ（当時スペインが支配）間にガレオン船による遠洋貿易＝ガレオン貿易があった（16世紀から19世紀）。中国やインドからマニラに持ち込まれた陶器、漆器、絹、綿布などがメキシコにわたり、メキシコからは銀貨、果物、カトリック宣教師、等々がもたらされた。つまりフィリピンは歴史的に世界各国から様々な物資が集まる豊かな港（場所）であった。スペインやメキシコからもたらされた鉱物は銀が主体であり、金自体は多くはなかったが、フィリピンは往時、金を多く産出したので富と金が結びついて連想されることになったと推測される。ガレオン船がフィリピン近海で難破したケースもあり、それらが積載していた財宝（富）が多く沈んでいるという言説は今でも語り継がれている。

さらに1898年フィリピンがスペインから独立する際に、長年の植民地支配でスペインが蓄財した金や財宝を各地に埋め隠した、特に全国にある教会敷地内に秘匿したという言説が各地にある。さらに独立指導者の間で意見のくい違いが出て内部対立に発展した際に、革命軍の多額の財源が喪失したという話がある。アントン・ルナ將軍が暗殺された折、彼の管理していた多額の資金も同時に消えたとされている。それが前大統領 Benigno Aquino III の母方の実家 Cojuangco 家（財閥）の経済基盤になっているとも噂されている。

このように富をめぐる話は歴史のさまざまな段階で生じ、確かめようのないまことしやかな噂として語り継がれている。

問題はなぜそのような話が次から次に出てくるかという点にある。そこには、フィリピンが豊かな土地であり、多くの富（金）が存在しねむっている、あるいは富が外からもたらされる、という考え方が底流にある。民俗学者 George Foster によるやや古典的な「限られた富」論にもつながる論理である。かつてわれわれの土地は豊かであった、しかし外部者である植民者に強奪され貧しくなった、豊かな富をもう一度取り戻すことは可能だ、富はどこか

に隠されている（あるいはもたらされる）、というストーリーだ。

フィリピンでは現在でも「本来豊かな国フィリピン」「資源豊富なフィリピン」「なぜこんなに貧しくなったか」と教科書や人々の日常会話の中で繰り返し語られる。国難にあった時や社会が危機的な状況に瀕した際に今でもフィリピン人が必ず口にする第二の国歌“Bayan Ko”（祖国）は以下の一節から始まる。Ang bayan kong Pilipinas, Lupain ng ginto't bulaklak.「わが祖国フィリピン、金 gold と花にかこまれた大地」。また戦後の各政権が国民に訴える際にならず「豊かなフィリピン」というフレーズが使用される（梶田景昭）。

戦争末期に日本軍が東南アジア各地で没収した金をフィリピンに集積したという言説が語り継がれている。山下奉文将軍がフィリピンに大量の金塊を持ち込んだといわれている。しかし山下奉文将軍が第14方面軍司令官として満州からマニラに派遣された1944年10月の戦況は、制海権、制空権も米軍にほぼ奪われ、日本軍として打つ手をすでに失いつつある段階であった。そしてフィリピンが太平洋東南アジア地域を管轄する南方方面軍の最後の決戦地として定められ、米軍との本土決戦への最後の砦、同時に本土決戦までの時間稼ぎのための捨て石に位置付けられた。こうしたフィリピンにシンガポール（南方軍政総監部）、マレーシア、ビルマ等からあえて金を集めることに合理性は見いだされない。フィリピンに東南アジアの金が集められたという言説は、フィリピンが富の集積される場であり、さらに言えば東南アジア地域でも最重要な位置づけにある「特別な国」であるという世界観が背景にあると考えられる。

1970年代に戒厳令統治をおこなったマルコス Sr.大統領はフィリピンの国名をマハルリカ Mahalrika に改めようと試みたことがある。マハルリカはスペイン統治以前のフィリピン社会における貴族戦士階級をさし、そこには自立した誇り nobility の価値が表象される。フィリピン・ナショナリズムを国民に鼓吹し自らの統治の正当性を築こうとしたのである。ここでも偉大な国フィリピンという言説が用いられている。日本軍によりフィリピンが最後の決戦地として位置づけられ、そして財宝が持ち込まれるという語りは多くのフィリピン人にとって受容しやすい土壌がすでに形成されていたのである。そして財宝が持ち込まれた以上どこかにあるはずだ、という認識に繋がっていく。

日本軍がバギオの司令部を捨て、ルソン北部山岳地帯に転戦する際に、武器、物資を各地に隠す指令を出したと言われる。移動前に各地で埋蔵作業がされ、現地の間人はその作業に従事させられるか、あるいは少なくともそれを目撃したものがいたはずだ。戦後になってそれらを掘り出してみようとなるのは不思議ではない。

さらにここに戦後の新しい要素が加わる。1960年代以降になると日本から多くの戦没慰霊訪問団がフィリピン各地を訪れた。遺骨収集作業が鎮魂儀礼と並行して行われた。政治文脈を超えて死者を慕い弔おうとする行為に触れた多くのフィリピン人が、侵略者、加害者であった日本人も同じ戦争を悼む人間であるという認識を持つに至ったことは不思議ではなく、それが日本への「許し」につながった（中野聡）。一方、頻繁に多くの日本人がフィリピンを訪れ、しかもけわしい山奥にまで入り込み地を掘り返しているのは、遺骨収集にかこ

つけた財宝探しだ、という語りが広がる背景にもなった。実際にバギオ、イフガオ等ルソン北部でその類の言説が多く残る。いまでもバギオ市などで大規模建設工事があると、予定建築物よりも相当広い区域を掘り返しているとか、建設をかたって財宝探しをしているのではないか、等々のうわさは常に人々の口にのぼる。

以上みてきたように金塊、財宝の存在は、現物としても確たる史料的裏付けを持った事実としても確認できない。にも拘わらず、富がフィリピンの土地に集積をしているはずだというフィリピン人の世界観が、財宝の存在を受け入れる土壌として機能しているのだといえる。

4. 植民地的心性

財宝探しと日本軍侵略・占領・蛮行に対するフィリピン人感情との関係は単純ではない。戦後直後の対日感情はアジアでも最悪で、1951年サンフランシスコ講和会議の場において、日本の戦中蛮行を許し難いことだと明言して非難した唯一の国がフィリピンであった。米国による対日戦争賠償放棄方針に異を唱えた3か国の一つでもある。しかし、現在ではフィリピンは最も親日的な国となっている。

日本からの多数の慰霊団の訪問がフィリピン人の対日本人感情に変化をもたらしたのも一つの要因である。政治的文脈において対日感情の緩和につながる重要な契機は、1953年7月6日、マニラ（Muntenlupa）に収監されていた日本人戦犯105名全員に対して発出されたエルピディオ・キリノ大統領による「大統領恩赦」声明と釈放である。それは冷戦下に組み込まれたフィリピンの外交上の判断であり、また国内における政治動向を勘案しての決断だったとはいえ、キリノ大統領の「許し」の姿勢は戦後フィリピンの対日対応の一つの基盤をなした。これについては後述する。

さらにルバング島に戦後ひとり潜伏していた日本皇軍敗残兵小野田寛郎が1974年に「投降」した際、時のマルコス大統領が敵としてではなく、国家の戦争に身を尽くして立派に戦った「英雄」として迎え入れた。この政治的パフォーマンスによっても対日友好が政治的に上書きされた。戒厳令独裁を進める一つの条件が日本からの経済援助、投資にあったため、政治基盤の盤石化にむけても、国民への説得材料としても政治的に利用をしたのである。とはいえ、こうした政治的対応と日本に対する対決姿勢の抑制が、戦後の対日感情の緩和と友好関係の構築に寄与したことは否定できない。

さらに広い文脈で見れば、スペイン、アメリカ、日本による330年以上の外国支配を受けてきたフィリピン人が広く共有しているとされるいわゆる「コロニアル・メンタリティ」（植民地心性）がある。植民支配者、宗主国権力を絶対的優位者と位置づけ、自身や自社会を従属的劣位者とみなす考え方である。絶対的優位にある宗主国や宗主社会を乗り越えていくのは不可能か、あるいは非常に困難だと捉えてしまう。しかし一方で、フィリピン人が心底、支配管理される状態を受け入れ、納得、満足しているわけではない。武力・暴力や税

制など制度によって抵抗し難い主従関係にほうりこまれながらも、内面においてはそれを否定し抵抗することを意識的、無意識的に求める。そこから生まれてくるフィリピン人の認識思考は、歴史的事実の記憶・保持とそこへの深い感情移入を敢えて避けることで、恨み、憤激、反感などのネガティブな感情の反復を抑えようとする。フィリピン人自ら「フィリピン人は忘れっぽいのよ」と揶揄して表現する底流には、あまりにも過酷な過去を切り離しつつ、現在をどのように上手にまた快適にすごしていくのか、将来をどのようにうまく切り拓いていけるのかという発想がある。これは2015年にフィリピン大学セブ校との戦争意識に関する共同調査の際にも感じられた。抗日ゲリラとして戦った高齢者が過去を思い起こしながらも、それを憎しみと辛さの経験としてだけではなく、時に笑い話を交えながら、調査者である日本人の気分を害することがないように気づかいながら語りを続けた。

山下財宝探しにかかわる人々や関連言説をいまだに受け入れている社会の背景に、日本軍の蛮行や日本軍事支配への恨みが必ずしもあるわけではない。80年もの長い時間の中で政治的にも、人々の日常生活の中でも、恨みの語りが続いてきたわけではなかったし、経済環境、生活状態の厳しい中では毎日をどのように暮らすか、将来をどう作っていくのかがより重要な課題だったのである。

ただし、日本支配へのネガティブな感情が完全に払拭されたわけではない。納得のできない日本支配、日本軍に対する否定的な感情を、日本軍の所有していたとされる富をフィリピンが自らの手に奪取することで、外交的直接対決や齟齬を避けながら、感情の整理をし解消しようとするものである。そもそも日本においても「豊臣埋蔵金」言説にしろ、「徳川埋蔵金」言説にしろ、一般に権勢栄華を誇った権力者や政治体制が瓦解する際に大量の財宝や資金が秘匿、埋蔵されたという話が流布し、にもかかわらず実際には発見されないことが多い。その背景には、前の体制に対するノスタルジーと恨みの解消などの動機が見出される。

5. 虚実混交のオントロジー

山下財宝譚が長らく語られることの背景にはフィリピン人の虚実混淆のオントロジー（世界観）が指摘できる。多くの国民はカトリック教徒である。しかもフィリピンのカトリックはヨーロッパからもたらされたものに、従来からあった信仰や価値観が加味され改変されて「土着化」し変容してきた（Folk Catholicism）。たとえば、マニラの黒人（焦げた）キリストを祭る「ブラック・ナザレ」、セブにおける幼児キリストを祭る「サントニーニョ」信仰などが有名である。パンパンガ地方では復活祭でキリストの受難を再体験するため自らを十字架にくぎ打ちしたり、ガラスや鉄片をまぜたムチで自らの背中をたたき血だらけになりながら教会まで練り歩くなどの奇行まがいの荒行 Maleldo が今でもある。イエス受難を追体験することで日頃の贖罪をはかろうという考えだ。キリスト復活の奇跡や、難病が奇跡的に治ることを信じる人も少なくない。

それはアスワン Aswang とかムルト Multo などの幽霊・妖怪談が多くの人々によって語

られたり、それらが再三映画化されることなどとも関連する。科学的証明の不可能な超常現象をとりこむフィリピン人の伝統的な世界観だ。そこでは現在生きている人間、この世を去り別の世界にいった祖先、そして人間の化身であり、また人間の行動を恐怖や畏怖により管理する妖怪や神秘的な神々が共存をしている。キリスト教もその枠組みの中に位置づけられて理解、受容される。つまり今人間が自覚的に認識しているもの、目に見えるものだけがすべてではなく、明確に認知・説明できないものも世の中には存在するかもしれないし、少なくともそれらを否定しないという世界観である。社会階層を問わず信仰心の篤いフィリピン人が人知をこえた神の存在を受け入れている事実や、国際世論調査においてフィリピンは、おまじない、占いを信じる傾向が強いという結果にもそれが表れている。また、フィリピンの各所で今でもある anting-anting という「お守り」は、かつて植民地独立闘争の際に、敵（スペイン勢力）の銃弾を除け、自分の命を守ってくれるものとして受け入れられ戦士を鼓舞した。旧日本軍人の「千人針」に似ているが、神秘性、迷信がより強い。

こうした虚実ないまぜの世界観からすると存在するかどうか不確かな財宝は、あるという確信は持てないが、一方で否定する必要もない。この場合、財宝の存在に明確な根拠は必要ではなく、あるかもしれない、という語りが過去からの諸事実を背景にしたものであり、さらに現在の生活条件と何らかの形でつながっているかもしれないと認識できただけで、どこかに「ある」と認識することが可能になる。山下財宝存在が科学的、あるいは史料的に裏付けられなくとも、あいまいな世界観の中で「ない」ことに確信ができないかぎり、「ある」ものとして受け入れるというメカニズムがフィリピン人に共有されているといえる。

6. 政治の腐敗

ここでは記憶をフィリピンの政治社会構造との関わりで整理する。上記4 虚実混淆のオントロジーが政治の世界では現実の具体的システムとして機能する。

フィリピンはアジアでいち早く米国型民主主義制度をとり入れた民主国家といわれている。一方で、伝統的有力政治家(trapo)が社会運営の全てを握ってしまうという矛盾した現実もある。それは歴史的に大土地所有者であった有力エリートがカネ、コネ、暴力を恣意的にかつ存分に駆使し、形式的には民主主義的な装いを施して社会運営に大きな影響力を持つという構造がある(John, Sidel の Bossism)。大統領、国会議員、地方議員といった国民市民の代表たるべき地位にある人々の多くが、裏で薬物取引に関わる、私兵 private army をつかった暴力事件を引きおこす、銃の密造をする、対立陣営政治家を暗殺する、などの事案が後を絶たない。こうした現状の中では表向き立派にふるまう政治家が、裏ではドラッグ王の顔を持つことになる。それらは国民も市民誰でもが知る黙認された事実である。しかしそれを表立てて追及すれば自らの命さえ危険にさらされる。実際フィリピンでは、進歩的なジャーナリスト、社会活動家などの多くが路上で暗殺される「超法規的殺人」Extra-judicial Killing のケースがロシアと並んで多い。政治の世界では明確に表と裏がある、表向きの正義と現実

は裏での不正義は常につながっており、それを明確にすること自体が危険を被る要因となる。こうした環境下で多くの者は表と裏をはっきりさせない、不正義や曖昧なものを容易には追及しないという観念が共有されているかに思える。

こうした政治文化の中で、1992 年、故マルコス大統領のイメルダ夫人がマルコス政権期の富は山下財宝が源泉であったと公言した時、国民の多くは信じがたいことだとは思いつつも、一方でそれもありうるかもしれないと受け入れる、同時に真実を追究することがもたらす危険をも無意識に認識し、実際にはそれを明確にすることなくうやむやにした。そもそもマルコスの富は日本の政府開発援助 ODA 横領や商社・企業との癒着など表に出ないルートで蓄積されたものなので、財宝が財源ではなかったといわれている。しかし事実を追及せず、そのうやむやさを国民が共有してきた。

前ドゥテルテ大統領（2016-2022）が、人権を無視した麻薬取り締まりや治安対策をしながらも高い支持を得ていたのは、そうした有力政治家の闇の世界に、民主主義や人権といった表面上の正義にとらわれることなく敢然とメスを入れたことに要因がある。その点で彼はフィリピン政界では異色の存在であった。虚実ないまぜの精神構造と現実の政治行動を結びつけて整理する議論は多くの政治学者、人類学者らによっても整理されている。Reylando Ileto 教授はフィリピンが 19 世紀末にスペインからの独立を果たしていく際、人々が自らの苦境をキリストの受難に重ね合わせて内化して理解し独立闘争に立ち上がったことを論じている。清水展・京大名誉教授は 1986 年のピープル革命、それに至るマルコス大統領の圧政、ベニグノ・アキノ暗殺を、多くのフィリピン国民がキリスト的受難になぞらえて理解し行動したと整理した。実際、ピープル革命の最終局面で多くの市民が反マルコスを掲げて街に 100 万人単位で繰り出し、丸腰で軍隊の前に立ちはだかった。その社会現象は当時のシン・カトリック枢機卿の呼びかけが契機であった。精神的世界と現実政治の接合が如実に表れた事例だといえる。

以上の様に、フィリピンでは現実政治が虚実混淆世界観と融合する形で展開してきた。そのため山下財宝も、戦後有力者の陰謀や画策によって隠され、未だにどこかに眠っているという言説も容易に受け入れられているといえるだろう。

7. 笑いの文化

フィリピン人は冗談好きだ。些細な事も笑いの種にし、つらい経験さえも笑いにする。現状の厳しさを正面から受け取り深刻にとらえるのではなく、笑いに昇華することで心理的バランスを取ると同時に気持ちの切り替えをする。フィリピンでの聞き取り調査では、日本軍に占領された時の経験を老人にうかがった。抗日ゲリラとして日本軍と闘った老人は「日本軍が去った後に残した靴や缶詰などの物資を大量に手に入れて、みんな大喜びだったよ、ははは」。実際には親戚や友人を目の前で日本軍に殺され、自分も命を懸けて銃撃戦を交えた人である。ある村の老婆は「日本兵の〇〇さんは私のことを気に入って求愛してきたわよ」

などと笑いながら話した。彼女の夫は教師をしており英語ができるというので日本軍に連れ去られ、以来帰って来ることはなかった。

500 年前にマゼラン率いる船団がセブに入港したことからスペインによるフィリピン植民統治が始まる。その最初の侵略者マゼランを恨みながらもフィリピン人はコミカルに揶揄して今でも歌う。「マゼランはフィリピンを征服した…。けど奴の“一物”はほんとに小さかった」。

あらゆる事実や経験をユーモアに仕立てる笑いの文化においては、山下財宝探索も、それを信じるかどうかは別として、ひとつの恰好の材料となる。莫大な資金と時間を投じて宝探しをできるのは、よっぽどの物好きか、散財余裕のあるお金持ちであり、山を崩さんばかりに探索しても出てきたものは土くれと水ばかりで報われることはない。宝探しに取りつかれている人を見て、多くの人は笑い話の種にして楽しむ。1950 年代にすでに山下財宝をもとにしたコメディ映画が作られている。現在でも、ブルドーザーや金属探知機、コンピューター解析法などを駆使して大規模に金塊探索をする人物あるいは集団の活動が YouTube でたえず流される。くわえて、土の中に予め埋められた宝箱が掘り出され、中からたくさんの宝石が出てくるといった子供だましのような創作動画を含めた無数の YouTube 動画が作られ公開される。しかも、十万単位のアksesがあり、多いものでは 500 万回以上の再生回数を得ているものもある。Yamashita Gold はそれほどに人気のある話題なのである。

財宝があるかどうかというのはもはや問題の本質ではなく、それをひとつの話のタネにしてみんなで楽しむこと自体に価値を見出しているともいえる。

8. 時間感覚

フィリピンには「時の流行歌はない」といわれる。例えば、街なかで聞かれる音楽は、最新のヒット曲のみならず、70 年代、90 年代の流行歌も混じる。それもオリジナル歌手による歌唱とはかぎらず、別の歌手によるカバー曲として、あるいは原曲に相当アレンジを加えたもので歌われることが多い。例えば日本の今の若者が K ポップを楽しむ一方、山口百恵や美空ひばりなど往年の流行歌を同列に楽しむというような光景である。

ここには過去と現在との時間的区別（流れ）は明瞭でなく、面白いものは時間を超えても面白い、良いものは時がたっても良いものである、というフィリピン人の時間的感覚がある。山下財宝も多くの人には眉唾だと思いつつ、しかし実際に発掘されたら面白いだろうというロマンとして楽しめる、またある人が大穴を掘ったけど何も出てこなかった結果も笑いの対象として楽しめる。記憶の消化として、復讐のロマンとして、また笑いの種として一旦受容されたものは、実際財宝が見つからない状況の中で、再三にわたり俎上に上るエピソードとなりうる。そしてなかば永遠に楽しめるエンターテインメントの位置さえ確立して受け入れられているといえる。

特に山下財宝譚では、噂の再生産機能が有効に働いている。「人の噂も七十五日」という

ように、噂には有効期限があり、時がたてば次第に忘れ去られるのが常である。しかし山下財宝の場合、たえず誰かが宝探しており、その関連情報やニュースが時折流れる。さらに開発プロジェクトで大規模な建設工事の過程で土壌が掘り返されれば、宝探しをしていると周りの者が連想したり、また政治家さえ財宝探しを政治に取り込んで利用する。それがまた映画の題材にもなる。フィリピンは英語が公用語であり米国との関係がいまだに強いので、米国人による小説やルポも再三作られる。こうしたことにより山下財宝譚は、永遠に続く噂話として、永久のエンターテインメントとなりフィリピン人に受容されている。

過去の認識の持続性という考えは、初めに述べた侵略の歴史を「忘却」することと矛盾するかに見える。しかしフィリピン人は、今をいかに最大限楽しく過ごすかを最重要視するため、ネガティブな経験や記憶はなるべく忘れ去り、逆に楽しめる要素であればそれはいつまでも温存して楽しむ、という楽観的な取捨選択をしているといえる。過酷な経験を消化する知恵としての「歴史認識の昇華」といえる。

みずからの国が外国に支配され、また実際には貧困で豊かではないという多くのネガティブな要素を抱える現実をそのまま受け入れるのではなく、「本来的には豊かな土地であった」「まわりが富をもたらす国であった」「どこかに富が眠っている」と読み替えることで誇りを維持する。

ただこれはフィリピン人のみに特有な姿勢だとはいえ、言説の内容は違えど、どの国にも見出されるものである。「日本は神の国だ」という昔の政治的プロパガンダもその類であるし、近年の「クールジャパン」「美しい国日本」言説は衰えつつある日本への郷愁を強がりてくるみ国民を鼓舞しようとする悲壮な政治姿勢である。「中国の夢を再興しよう（過去の栄光を取り戻そう）」なども文脈が異なるとはいえ、歴史を組み替えながら国民に誇りを醸成する狙いを持つ。フィリピンも例外ではない。

9. 許しの文化

集団的歴史記憶の形成にとっては為政者が過去をいかに整理し社会にアピールするのが、大きな要素となる。第二次大戦の過酷な体験とそれに伴う恨み、憤激を絶つ決断をしたのがエウピリド・キリノ大統領である。彼自身、マニラで妻と子どもを日本軍によって殺害されている。にもかかわらず1953年マニラに拘留されていた105名の日本軍人戦犯すべてを「大統領恩赦」により解放した。国民の間で日本に対する恨みの感情はまだ癒えておらず、議会でもほとんどの政治家が恩赦の発出には反対をした。その後、日本との戦後賠償に関しては複雑な過程と国民感情がありながらも、戦争や軍事占領に関する話題が日本・フィリピン間で外交的桎梏となることはなかった。

キリノ「恩赦」の決断の背景にはいくつかの政治的要因があげられる。第一に戦後のフィリピン経済の復興が急務であったこと。荒廃した経済を立て直し国民生活を早期に安定させるためには米国の支援を受けるだけでなく、日本の資金技術協力を積極的に受け入れる

ことがより合理的な選択だと考えられ。第二にアジアにおける冷戦構造が苛烈化し、朝鮮戦争を目の当たりにしながら米国庇護下にあるフィリピンが早期にアジア反共連合の一角を確立する必要があると判断したこと。第三に国内における左翼武力闘争を早期に鎮圧し、同時に政治の安定を図る必要があったこと、等があげられる。

判断の背景に政治的な要因があったにせよ、キリノ自身が最愛なる家族を奪った日本、日本人を釈放するという決断は、感情的な葛藤を乗り越えなければ下しがたかったはずである。実際その決断がキリスト教的「許し」として語られ、多くのフィリピン国民も同じ脈絡でそのメッセージを受け取り、自ら納得をするメカニズムが働いたといえる。

10. おわりに

現実味の乏しいお宝発掘に多くの人が関心を寄せるという山下財宝にまつわる背景を掘り下げて考察すれば、そこにはフィリピン人の精神世界や歴史観、あるいはフィリピン社会の構造が見えてくる。「財宝」につながる何かが実際にあったのかもしれない。しかし、実物が存在するかどうかではなく、「存在するものとして」それを受け入れ、引き継いできたことにこそ、フィリピン人、フィリピン社会の特性があり、また、フィリピン人の精神構造と世界観、そして歴史的感覚が反映されているといえる。日本人の理解を越えている側面もある。しかしそれは必ずしも彼らの考え方が劣っているわけでも遅れているわけでもなく、むしろ過酷な歴史経験と社会状況を乗り越える過程で培ってきたフィリピン人の優れた知恵であり世界観だといえる。そこには日本人も見習うべき観点が多分に含まれている。

日本とアジア諸国の外交関係を考える時に常にネックとなる戦争認識に関して、フィリピンの歴史観や世界観は友好的未来関係を築くためのヒントを提供するともいえる。過去の事実を消去することは許されないが、それをいかに認識し、記憶と忘却を使い分けていくのかは今後も深く追究すべき論点としてある。

【謝辞】 小稿は公益財団法人 JFE21 世紀財団アジア・歴史研究助成を受けて実施されて調査研究成果の一部である。記して御礼申し上げたい。また共同研究者として尽力いただいた Karl Ian Cheng Chua フィリピン大学准教授にも御礼申し上げる。

参考文献

- 石田 雄(2000) 『記憶と忘却の政治学：同化政策・戦争責任・集合的記憶』明石書店
- 清水 展 (1991) 『文化のなかの政治：フィリピン二月革命の物語』弘文堂
- 高橋五郎 (2008) 『天皇の金塊』学研
- 茶園義男 (1987) 『BC 級戦犯フィリピン裁判資料』不二出版
- 茶園義男 (1987) 『BC 級戦犯米軍マニラ裁判資料』不二出版
- 永井 均 (2013) 『フィリピン BC 級戦犯裁判』講談社選書メチエ

中野 聡 (1997) 『フィリピン独立問題史：独立法問題をめぐる米比関係史の研究
(1929-46 年)』 龍溪書舎
生江有二 (1995) 『山下財宝：フィリピン黄金伝説を行く』 文藝春秋
フクミツ・ミノル (1982) 『将軍山下奉文：モンテネルパの戦犯釈放と幻の財宝』
朝雲新聞社

Bankoff, Greg, 1996, *Crime, Society and the State in the Nineteenth Century Philippines*,
Ateneo de Manila University Press.
Ileto, Reynald Clemena, 1979, *Pasyon and Revolution: Popular Movement in the Philippines*,
1940-1910, Ateneo de Manila University Press.
May, Glen Anthony, 1996, *Inventing a Hero: The Posthumous Re-Creation of Andres
Bonifacio*, The University of Wisconsin Press.
McDougald, Chaeles C., 1993, *Asian Loot: Unearthing the Secrets of Marcos, Yamashita and
the Gold*, San Fransisco Publishers.
Phelan, John Leddy, 1967, *The Hispanization of the Philippines: Spanish Aim and Filipino
Responses, 1565-1700*, The University of Wisconsin Press.
Pelmoka, Juana Jimenez, 1996, *Pre-Spanish Philippines*
Rafael, Vicente L., 1988, *Contracting Colonialism: Translation and Christian Conversion in
Tagalog Society under Early Spanish Rule*, Ateneo de Manila University Press.
Ryan, Allan A., 2012, *Yamashita's Ghost: War Crime, MacArthur's Justice, and Command
Accountability*, University Press of Kansas.
Sidel, John T., 1999, *Capital, Coercion, and Crime : Bossism in the Philippines*, Stanford
University Press .

The Manila Times, micro-film., various dates

The Qurino Papers stocked in the Heritage Library, Makati, the Philippines

¹ 1971 年に Rohelio Roxas がバギオで金の仏像を発見したとされるが、その後仏像の存在
は確認されていない。当時のマルコス Sr.大統領に接収されたという言説が流布する。